

目で見ると 岡崎・額田の100年

この資料は「目で見ると岡崎・額田の100年」からの抜粋である。

目で見ると岡崎・額田の100年

発行日：1992年5月16日、編集：岩月 栄治 発行人：森田 彰

発行所：株式会社 郷土出版社

ISBN：ISBN4-87670-027-3

青野の軍楽隊（下青野町、明治39年4月） P40

黒羅紗、金ボタン、金モールのダブルの制服に羅紗帽子。ラッパや太鼓を鳴らしての演奏は、地域でも評判であったろう。この年、合併で六ツ美村ができた時にも出演したと思われる。



六ツ美の悠紀斎田 P56

大正3年（1914）、大正天皇即位の大礼と大嘗祭を同年11月に行うことが官報で通知された。大嘗祭は即位後に初めて新穀を神々に捧げる行事で、その新穀は京都以東の悠紀斎田と京都以西の主基斎田という特別に選ばれた栽培田で作られる。同年2月、愛知県下に悠紀斎田を置くことが宮中から通達されて、県では11ヶ所の候補地を選び、その中から当時の碧海郡六ツ美村大字中島を斎田地に決定したが、4月の昭憲皇太后の逝去により、即位礼は1年延期となった。

あくる大正4年4月、諒闇が明け、同月、悠紀斎田祓式が行われた。以後、耕作が本格化し、育苗、田植え、刈り入れなどのたびに厳かな儀式がとり行われた。6月の御田植祭には観衆が7万人も集まったといい、碧海・額田・幡豆3郡の各戸には国旗が飾られた。稲が実った9月には、いよいよ刈り取りの抜穂式が斎田で行われたが、その抜穂式の参加者の身をあらかじめ潔斎するための大祓の儀は矢作川河原の大聖寺禰で催された。この両日とも多数の参拝者が式場に押し寄せた。

収穫された稲は乾燥・脱穀・X精したあと1粒1粒を拡大鏡で点検し、選ばれた米は唐櫃に納めて安城駅から汽車で京都へ運ばれ、11月の大嘗祭に供納された。

村や県、それに悠紀斎田の所有者、碧海郡中から選ばれた男女123人の耕作者にとって、斎田の経営は晴れがましく名誉な一大事であった。

六ツ美村に悠紀斎田が決定（中島町西町、大正3年） P56

六ツ美村村長をはじめ村民は、決定された斎田地にしめ縄を張りめぐらした。あわせて、道路普請も進められた。



斎田苗代の準備（中島西町、大正4年4月） P56

竹矢来に囲まれた斎田の一面で、4月16日から苗代づくりが始まった。土を起したあと、藁灰が撒かれた。数日後、練粕を施肥してから表面を均し、水を張り、苗床が完成。



御田植の予行演習（中島町、大正4年） P57

6月に予定された御田植祭を前に、地元では入念な準備がなされた。男女2人ずつを1組とした6組の植女植男が定規を置いて正確に苗を植える練習まで行われた。

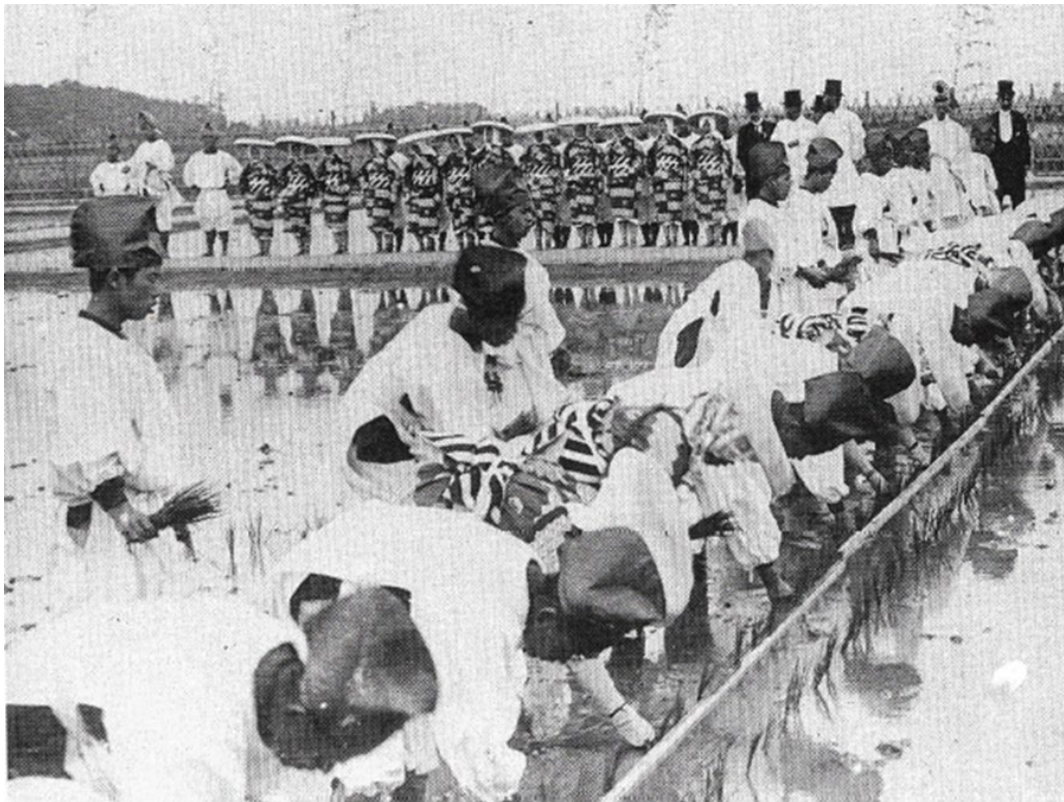


早乙女の田植踊り（中島西町、大正4年6月7日） P57

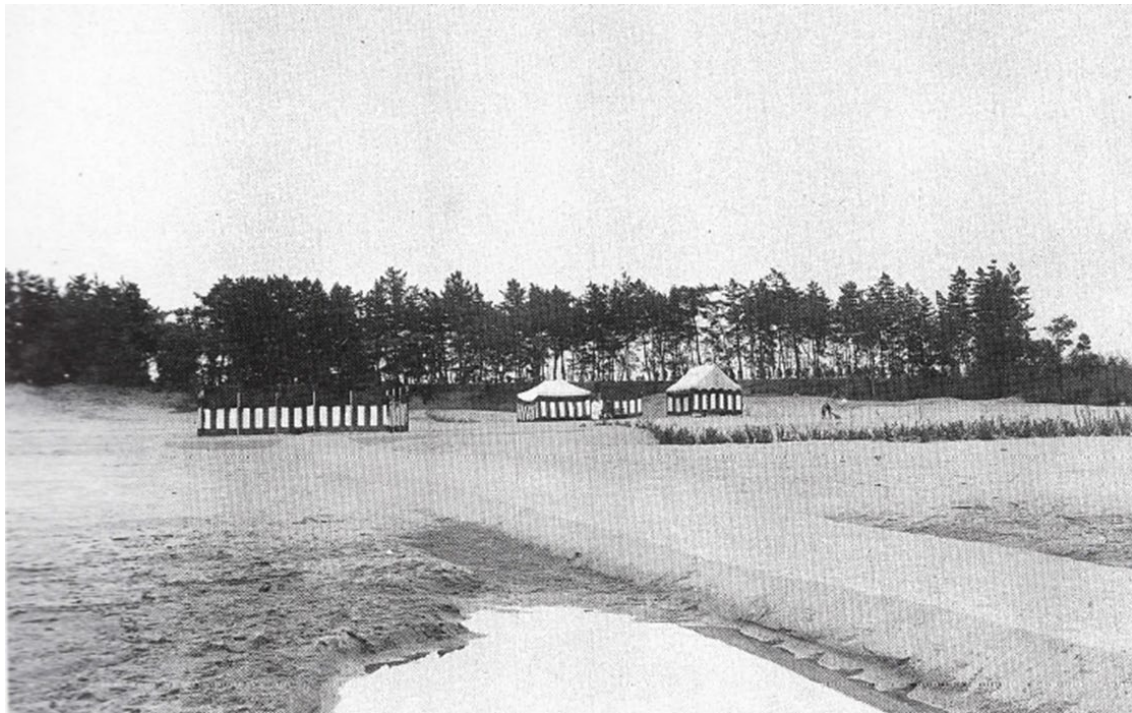
田植時に歌と踊りを披露。御田植は4日間続いた。



御田植始の儀早乙女の田植踊り（中島西町、大正4年6月5日） P57
御田植祭の儀式のあと、古式装束を着て田植が始まった。

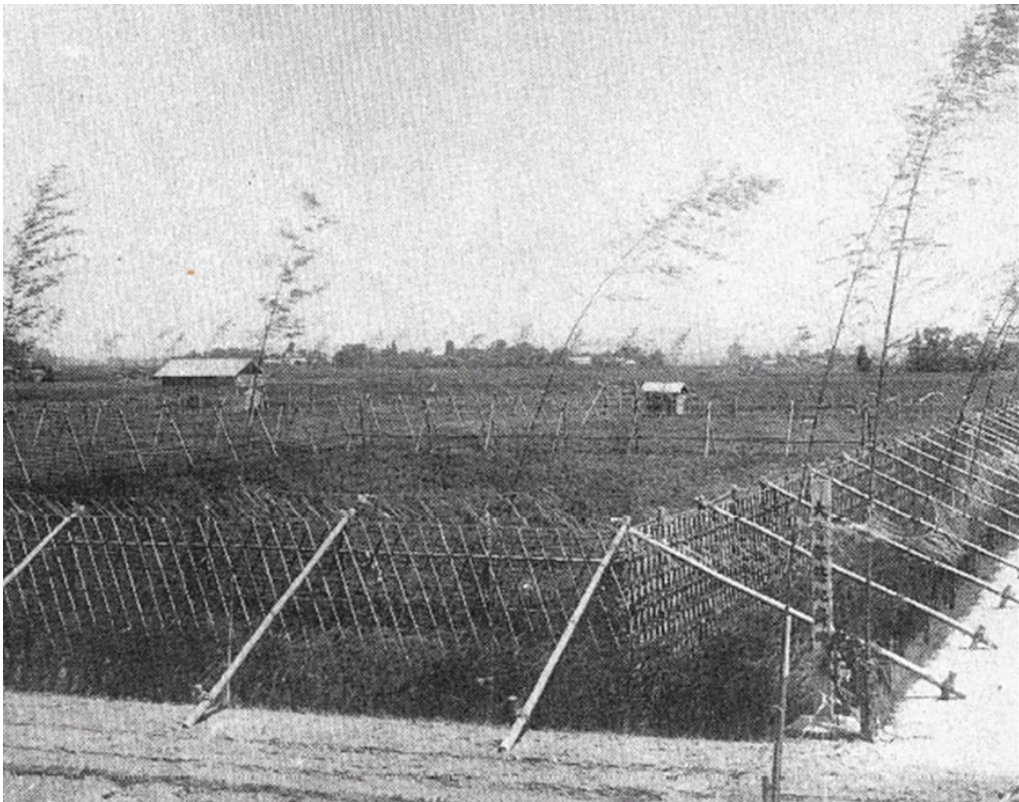


矢作川河原の大祓式場（中之郷町、大正4年9月19日） P57
抜穂式参列者を清めるための大祓が行われた。



斎田の防風対策（中島西町、大正4年） P57

8月26日、暴風襲来の報があり、村民を非常招集して作った。



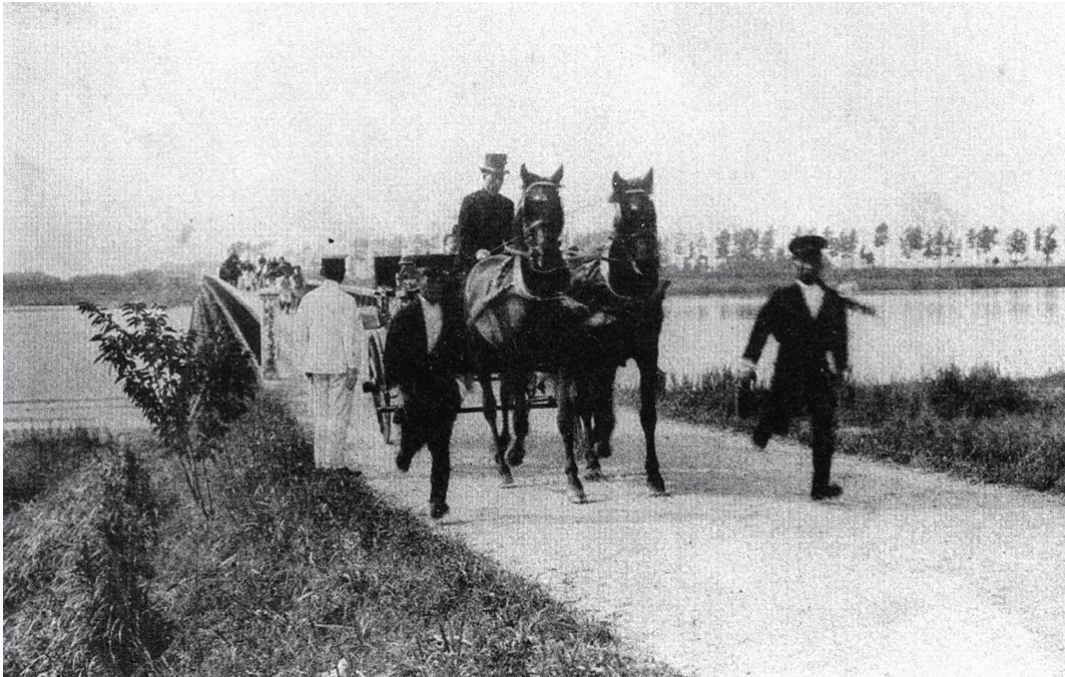
勅使、拔穂式場へ到着（中島西町、大正4年9月20日） P58

斎田行事で最大事の抜穂式の日を迎えた。前日の大祓式後、中島の斎館に宿泊した勅使一行が人力車で到着した。



美矢井橋を渡る勅使（上青野町、大正4年9月19日） P58

宮中からの勅使は安城駅から馬車に乗り、矢作川を渡ってすぐの大祓の式場へ向かった。



御用藁の発送（下青野町、大正4年） P58

六ツ美村立農業補修学校は悠紀斎田が決定した記念に設立され、藁稲栽培を担当。



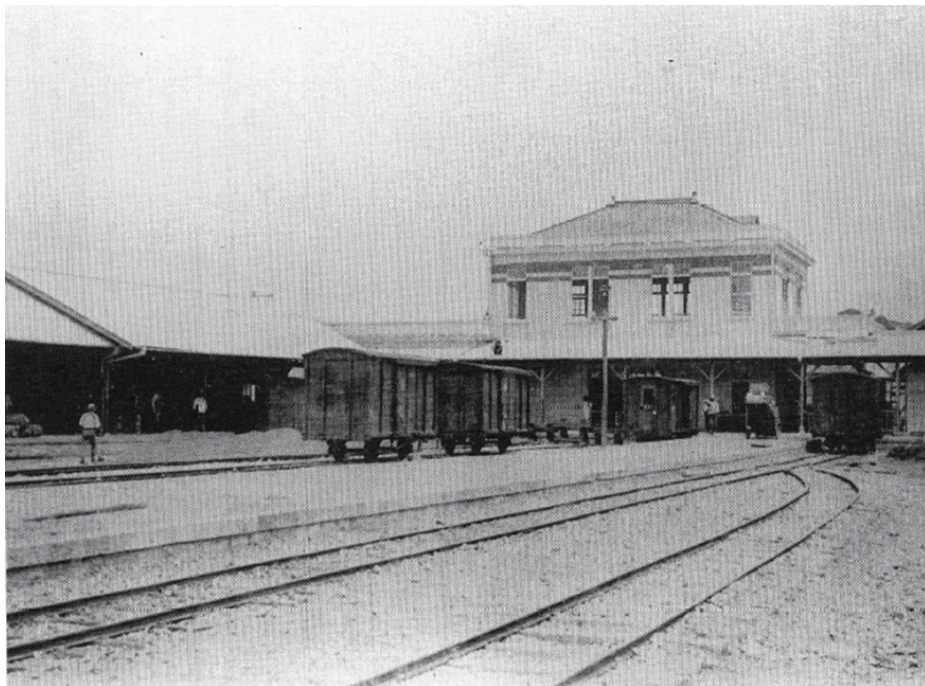
御用藁の刈取り（下青野町、大正4年） P58

斎田の新穀以外に、玄米・白米・籾・藁も大札用に用命があり、献上された。



西尾鉄道の岡崎新駅（柱町、大正時代） P69

地元では「軽便」の名で親しまれた西尾鉄道は、明治44年に開通した。岡崎新・土呂・占部・中島など8駅があった。



高橋用水口（高橋町、大正4年頃） P72

高橋用水は明治17年に完工し、現在の六ツ美地区や西尾市東部に矢作川の水をもたらした。用水水源地に佇むのは、当時の早川六ツ美村村長らである。



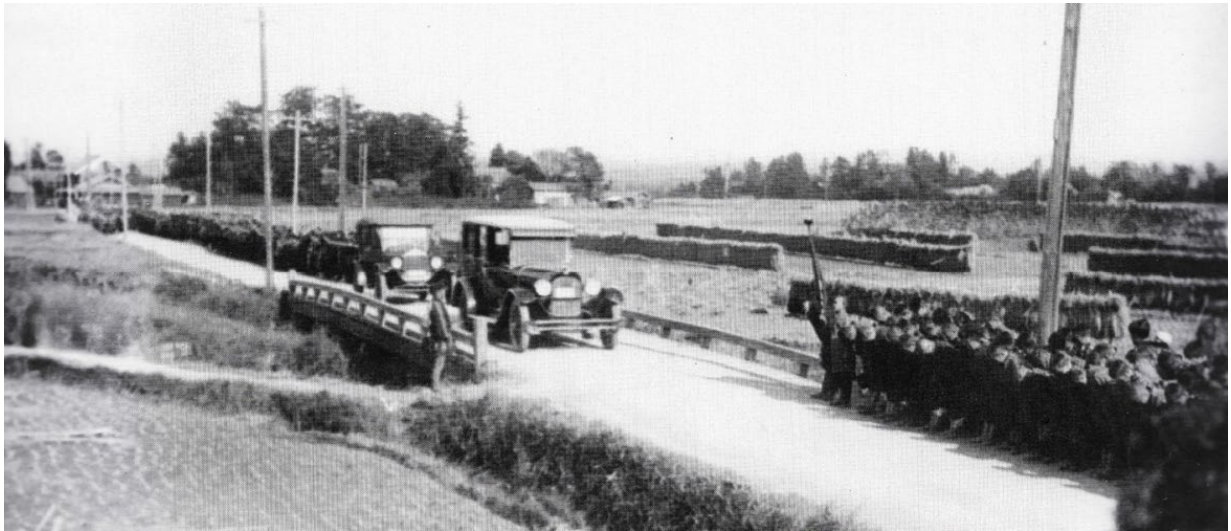
御勅使、六ツ美村へ参向（下青野町、昭和2年11月17日 P75

昭和2年11月、愛知県下の陸軍特別大演習の際に、勅使が六ツ美第一尋常高等小学校を訪問。4日後の21日、昭和天皇の岡崎行幸があった。



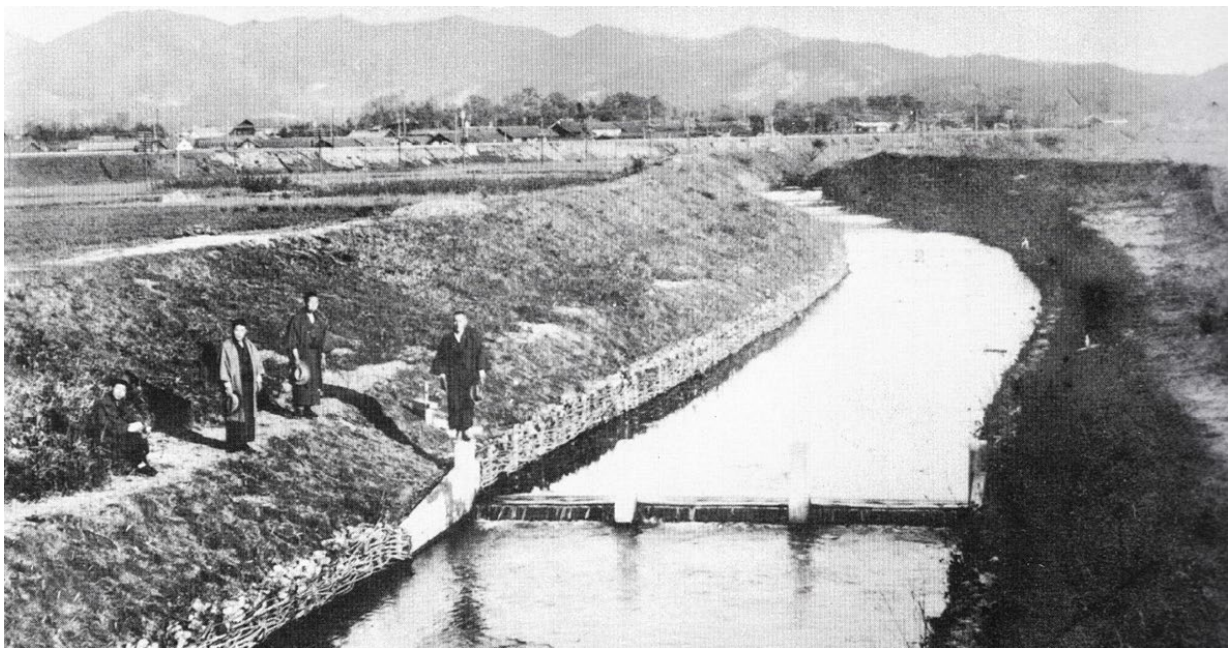
勅使歓迎の人垣（下青野町、昭和2年11月17日） P75

自動車に乗った勅使を出迎える六ツ美の人たち。六ツ美は大正天皇の悠紀斎田を経営した関係で、皇室とつながりがあったという。



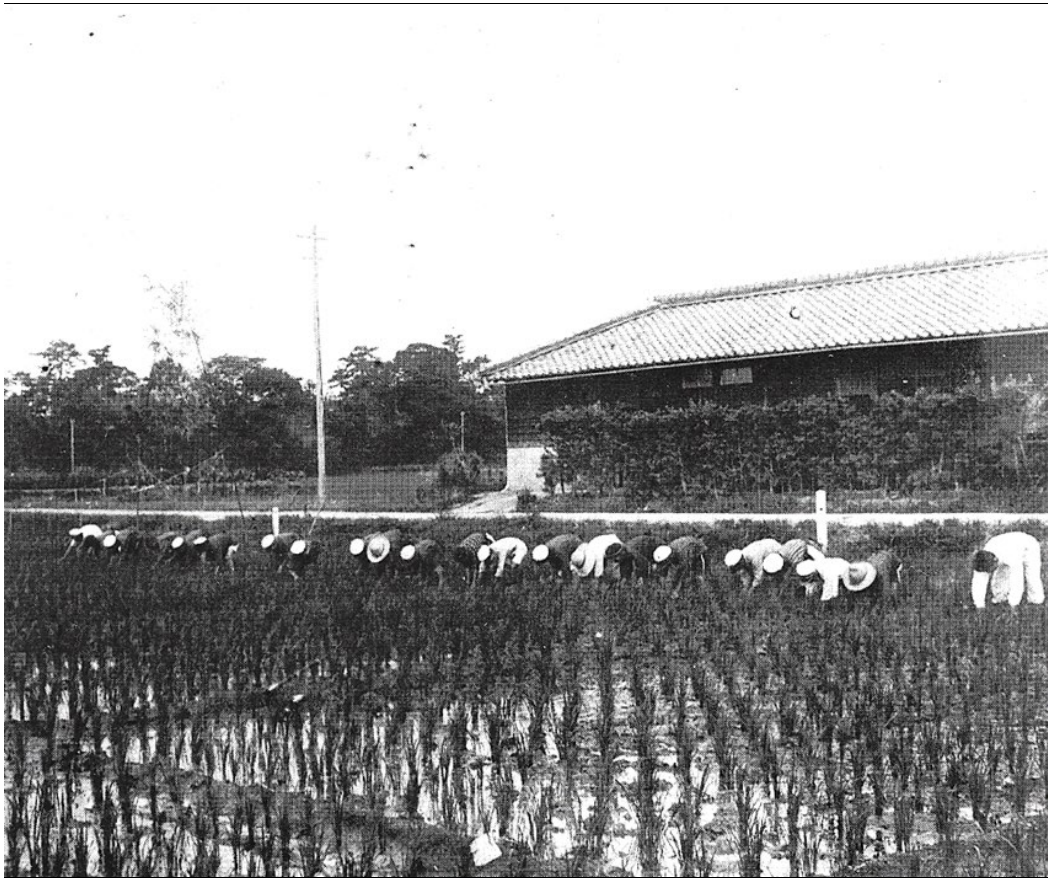
広田川の河川改修（幸田町、昭和15年） P78

幸田、福岡、六ツ美地区を流れる広田川は、河道も複雑で流れの悪い川であった。ひとたび大雨が出ると幸田の菱池一帯は冠水で悩まされていた。広田川改修工事が昭和8年に完成して、水はけが改善された。



農業実習（下青野町、昭和4年7月） P88

六ツ美村立農業補習学校のひとコマ。小学校卒業者を対象に農業実務を教える補習学校は、明治後期から各地に設置されていた。



日本のデンマーク 六ツ美の菜種栽培 P92

かつて矢作川沿岸の旧矢作村、六ツ美村、福岡村一帯は、水田の裏作として菜種栽培が盛んであった。春ともなると、あたり一面の景観は黄一色となり、季節の風物詩となっていた。

多角経営農業のひとつとして始まった菜種栽培が定着し、拡大したのは昭和初期の六ツ美村立農業補習学校教頭太田功平と、同校教員らによる栽培研究の成果によるところが大きかった。太田は昭和2年、同校へ赴任し、教員らとともに蕁薹（うんたい）の研究に着手した。文献を読み、様々な条件での試験栽培を行った。28品種に及ぶ苗の特性調査、最適肥料の研究など、その結果は「蕁薹調査」として発表された。

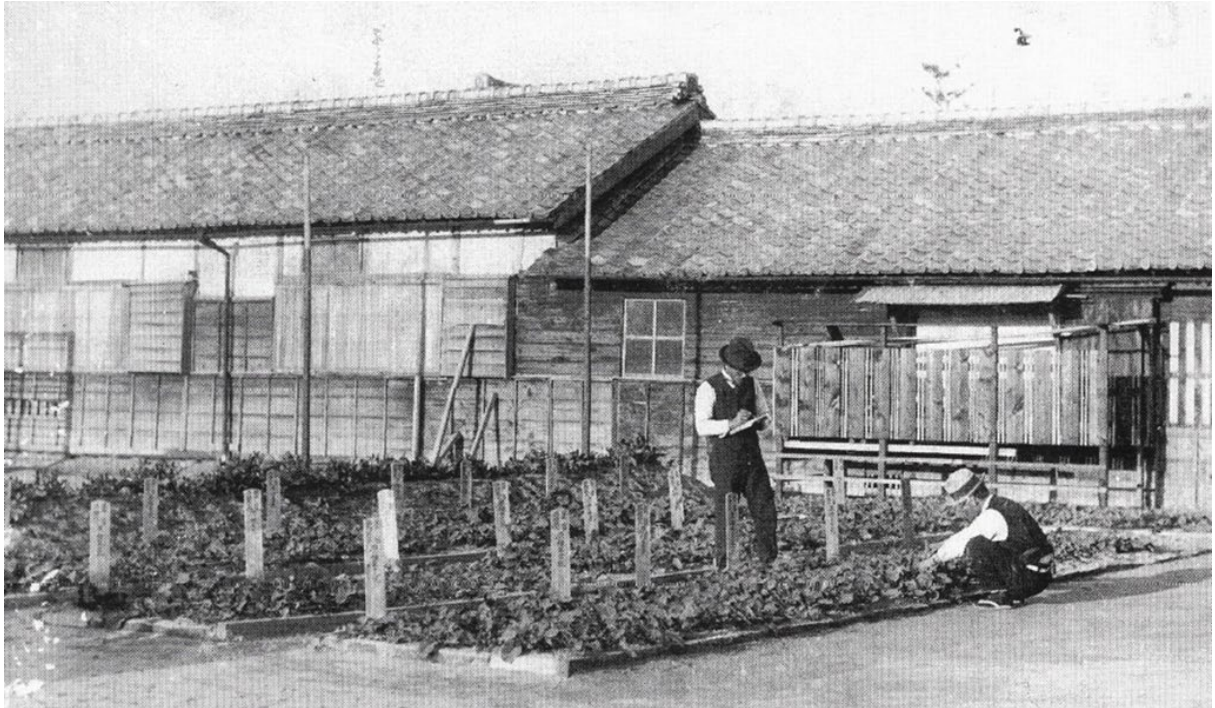
昭和初期は経済恐慌の時代で、特に農村不況は深刻であった。六ツ美村立農業補習学校はこうした社会情勢のなかで、実際に農業に携わっていく生徒たちに直接役立つ教育をしようという意識が高かった。

菜種栽培は六ツ美を中心に周辺にも広まり、日本デンマークと呼ばれる多角農業の先進地のひとつとして、六ツ美へは政府要人、農業関係者らの視察が相次いだ。

終戦直後を除き、昭和30年過ぎまでは盛んであった菜種栽培も、連作障害や油の材料が輸入原料に代わっていったことで、次第に廃れていったが、今も一面の菜の花畑への憧憬は人びとの間に生きている。

菜種の苗の特性調査（下青野町、昭和2年10月） P92

六ツ美地区の菜種（蕒臺うんたい）栽培は、大正後半に始められたが、その特性についてはまだよく知られていなかった。六ツ美第一農業補習学校の教員たちが、この菜種の研究に取りかかった



見事に成育した苗（合歓木町、昭和5年11月19日） P92

菜種の品種や施肥、移植などの栽培方法の研究は、実際に試験栽培を繰り返しながら進められた。そして、優秀な模範となるような苗が作られた。



一面の菜の花畑（合歓木町付近、昭和4年5月） P93

これは、菜種の1株あたりの最高収量を調査した時のひとコマで、立っているのは栽培者と栽培指導者。この当時、見渡す限り一面の菜種が広がっていた。



養蜂の研究（下青野町、昭和6年8月） P93

六ツ美村立農業補習学校の教員たちは、実際の土地に適した農業と、その従事者を育てようとする意欲に満ちていた。菜種研究が進み、菜種栽培が広がる中で、菜の花を利用した養蜂にもその関心を向けていった。



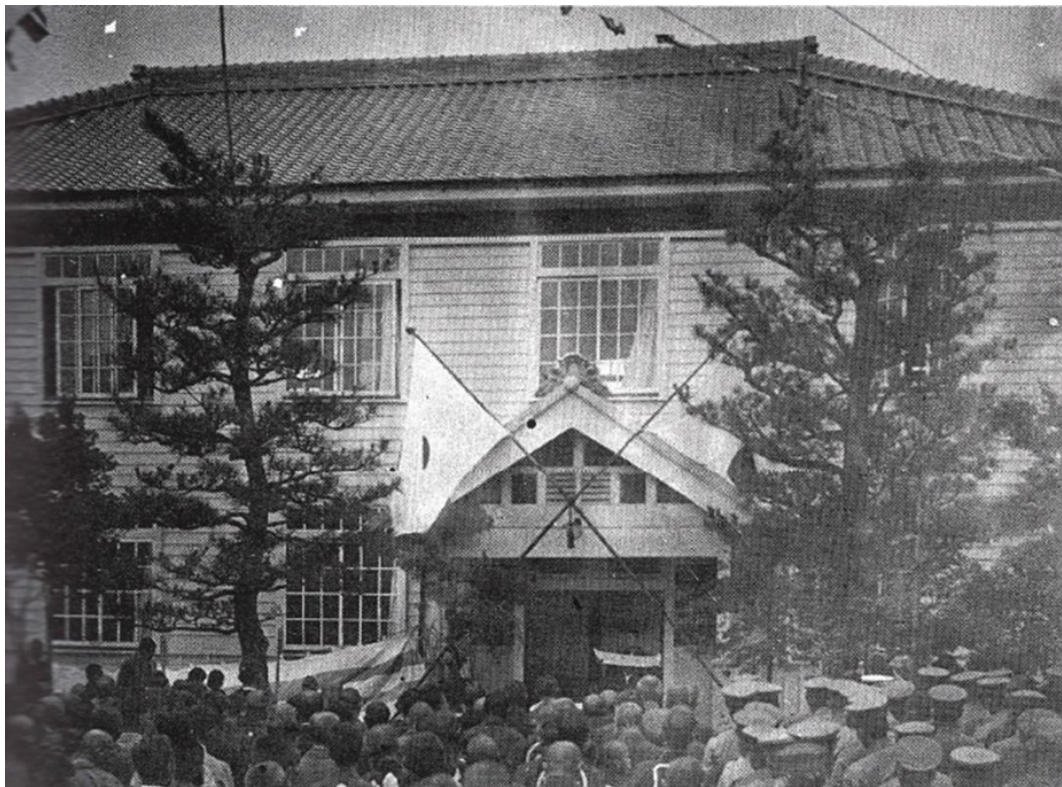
相次ぐ菜種作り視察者（合歓木町付近、昭和4年6月19日） P93

六ツ美の菜種栽培を視察に来た落合内務部長一行。その後、高松宮殿下、商工大臣、内大臣等の視察が続き、六ツ美の評価は高まった。



六ツ美村役場（下青野町、昭和戦前） P100

戦前から昭和37年の岡崎市編入まで続いた村役場の建物。



六ツ美の村葬（中島町、昭和10年代） P118

六ツ美第三尋常小学校の前を延々と葬列が続いている。日中戦争開始後は、葬儀も村をあげての大がかりなものであった。

